

怒！ 絶望的な世界情勢： 自国・自分第1主義が はびこっている！！

どうたれ内科診療所 / 千葉大学医学部臨床教授
堂垂伸治

今の世界と日本の情勢を判断すると、
僭越だが人類という種は少しも進歩し
ていないように思う。

〈歴史は繰り返す〉

世界情勢は21世紀になったのにまるで20世紀初頭をなぞるような動きである。ロシアのウクライナ侵攻はすでに3年に達し第1次世界大戦並みになっている。加えてイスラエルのガザ侵攻があり、死者数は5度の中東戦争の半数を超えている。人類はどうして同じようなことを繰り返すのか、憎悪の連鎖を作るのか。為政者達は過去の歴史から何の教訓も得ていないのか。

世界史には疎いが、欧州は始終どこかで戦争を繰り返してきた。宗教戦争や100年戦争など欧州の歴史は戦争史と言っても過言ではない。クラウゼヴィッツの「戦争論」が生まれたのも当然だ。今回のロシアのウクライナ侵略もこの

一環なのか、そもそも多民族の共存が不可能なのか。

〈侵略戦争は許されない〉

ロシアのウクライナ侵略は弱肉強食の動物世界と同じ論理だ。これを許せば小国の多くが大国に飲み込まれることになる。中国の台湾侵攻もあり得るし、ロシアが北方領土を返還しないどころか北海道に攻め入る可能性もあるということだ。

本原稿記載時にはアメリカがウクライナ支援を停止した。トランプ政権はウクライナのレアアースを人質にロシアと交渉するという。「弱い者いじめが許される」、「被害者を懲らしめ盗人を守る」というのだ。そう言えば私たちが若い頃、大国アメリカは小国ベトナムを侵略し蹂躪していた。アメリカ軍はベトナム・ソンミ村で400人以上を、ロシア軍はウクライナ・ブチャで1400人以上

をそれぞれ大量虐殺した。正に象徴的で人類の汚点と言える。ロシアもアメリカも「最も軽蔑される国」に成り下がった。私たちが小さい頃に慣れ親しんだ「勸善懲惡」は今や死語となっている。

〈アメリカ第1主義の末路〉

今回アメリカはトランプ政権となり、アメリカ第1主義を唱える。「アメリカさえ良ければいい、他国はどうなってもいい」と宣言している。「自分だけが良ければ他人はどうなってもいい」、「自国が豊かになれば他国がつぶれてもいい」という。少なくとも半数のアメリカ人がこの思想を許している事実は驚くべき事である。これはアメリカの経済格差が深刻化し国民生活が危機に陥っている反映なのだろう。

トランプは具体的には「関税」を武器に自国第1主義を実現しようとしている。しかし今や現代世界は多くの国々の連携・協力で成り立っている。膨大な供給網が成立し各国の経済を支えている。これらを寸断するという事は当然アメリカ経済も混乱し景気は後退し物価高を招き貧富差も拡大させる。こんなことは経済学のイロハ、自明の理のはずだ。今後数ヶ月でアメリカ自身や世界経済全体が衰退・縮小するだろう。トランプは中間選挙前にはレームダック（死に体）になるに違いない。

〈揺らぐ民主主義、横行する専制独裁体制〉

今やアメリカは民主主義国とは名ばかりで、トランプ政権の一党独裁＝大統領独裁で「強欲資本主義」に墮落している。さらに世界中の国々で「民主主義」はポピュリズム、大衆迎合主義が吹き荒れている。各国のナショナリズムを刺激し「自国第1主義」が席卷している。

他方、ロシアや中国も20世紀初頭の皇帝のような専制統治体制である。名ばかり選挙や、一党独裁制で国民に恐怖心を与え、異論や不平・不満など一切許さぬ専政を強いている。超監視社会を作り国民の自由や人権を封殺している。国民・民衆は無力感・虚無感に陥らざるを得ず、「自分たちさえ良ければいい」「自分だけを守る」として追認している。いずれもとりあえず「パン」は提供されているが、これが尽きれば天下動乱の時代がやってくるだろう。

私たちは80年以上経過して、ラセン的にあのナチス・ファシズム・軍国主義の時代を生きているのかもしれない。歴史は繰り返す、1度目も2度目も悲劇として。

(以下続く:次回は日本の現状に言及します)

(どうたれ・しんじ)